

〈翻訳〉

## 中国回族における歴史的石碑の価値と研究の現状<sup>1)</sup>

雷 暁 静<sup>2)</sup>

辺 境・市川 聖 訳

1. 回族における歴史的石碑の重要な価値
2. 回族の歴史的石碑の発掘と研究
3. 整理・翻訳・注釈
4. 文化の研究

### 1. 回族における歴史的石碑の重要な価値

封建社会の民族差別意識によって、回族の歴史を記載する文献は、漢民族の文献より数的には少なく、視点については客観性が欠如する場合がある。そのため、中国全土に散見する石碑は回族の社会、政治、文化、教育、代表の人物、宗教、民族関係と重大なる事件を反映するという高い史料価値で評価されている。特に、石碑に残存している重大なる事件に関する記載は、中国民族史の補完となっている。宗教的意識に関する説明は、回族が中華文明に融合した歴史を反映している。祖先の事跡や外来文化による表記は、回族とアラビア、ペルシア、中央アジア、西アジアにおけるイスラム教徒の血縁の文化的関係、さらには、現代の回族における居住特徴の歴史的原因を提示する。

具体的には、以下のような価値を示している。

#### (1) 史料としての価値

秦朝から盛んに形成された漢民族の石碑に比べて、宋・元朝から現れた回族の石碑は歴史が浅く、保存の質も劣る。しかしながら、回族の歴史には貴重な史料になる。

#### ① 歴史事件の証明

石碑の記載によって、宋・元朝からイスラム教が中国で流行したことに関する記載は証明されている。元至正十年（1350年）の「重立清浄寺碑」には、「隋開皇七年に、サハバサアのワガスという者はイランから海路で広東省へ訪れた。モスクを建設し、懷聖という名を賜った。宋紹興元年に、…氏が泉州に来朝し、この寺院を泉州の南城として建設した」（原文：「至隋開皇七年，有撒哈八撒阿的斡葛思者，自大突（即大食，今伊朗等地）航海至廣東建禮拜寺于廣州，賜号懷聖。宋紹興元年，有……来泉，創造兹寺于泉州南城」）という記載があり、宋・元朝に海路を利用して中華に入る回族の祖先に関する重要な史料となっている。

さらに現在、保存されている中で、回族の歴史を漢字で記載した「重修禮拜寺碑」には、「回族の人々は全国に広がり、特にここには多く存在している。朝夕の礼拝を欠かさない」（原文：「以回回之人遍天下，而此地尤多，朝夕亦不廢礼」）の表記は、元代の回族がすで

に中原地域で定住した歴史を提示している。

瀋陽故宮博物院が保存している「瀋陽路城隍廟碑」（1352年）には、「当廟は東方に回族住民の家に接する」と表記されており、600年前に回族が遼寧省瀋陽市に定住したことを証明している。この石碑は、中国の東北地方の回族史研究に不可欠な史料となった<sup>3)</sup>。

安徽省安慶市南関モスクの「敬奉死難回胞碑」には、明崇禎十六年（1643年）と清咸豊二年（1852年）に安慶回族が2度も虐殺され、モスクが壊滅された事件を記述されている。

民国三十三年（1944年）の雲南省「迁葬清咸豊丙辰年昆明五方被難回教親友碑記」には、清咸豊六年（1856年）4月に杜文秀による武装蜂起が失敗した後、回族住民2万人が雲南省政府によって虐殺され、その79年後に、遺骨が回族住民によって同一墓地に埋葬された事件を如実に記されている。

そのほかにも、雲南省の賽典赤一家の石碑、北京市の両通王岱興墓碑、陝西省の「修建胡太師祖佳城記」、湖北省武漢市の「馬銓華表碑記」、甘肅省臨夏市の「馬千齡墓表」などがある。これらは中国におけるイスラム教の発展や著名な回族である王岱興氏、胡登洲氏、馬銓氏、舍起靈氏、西北馬氏一家の歴史には重要な史料となっている。

#### ②祖先の確証

回族は中東・中央アジアのイスラム教と中国本土の民族が長期間にわたって融合された新たな民族である。現在、福建省泉州市海外交通史博物館、江蘇省南京市普哈丁墓、浙江省杭州市鳳凰寺と海南省三亚市で保存されるアラビア語やペルシア語の碑文は、回族の起源と発展を実証した。回族の祖先が中国の沿海部と内陸部に移住した後、内陸部から新疆地域に至る移住の歴史が石碑にも反映されている。清咸豊十一年（1861年）の「黒龍江韓氏淵源碑」と民国十四年（1926年）の「成都馬君綸三墓志銘」によると、清朝中期に山東省および四川省から移住した回族は黒龍江省で定住し、馬六舟一家はチチハルの回族名門となった。また、河北省、山東省、陝西省からの回族は現在の内蒙古自治区で貿易を行いながら定住した。現在の内蒙古自治区にも回族の墓地があり、清雍正十二年（1734年）には陝西省で回族の石碑が発見された。これを踏まえ、筆者は2006年に西藏チベット族自治区のラサ回族墓地の石碑で、寧夏の「固原」という文字を確認した。これは回族が内陸部を経て、また国境近辺にまで移住した歴史を証明している。

#### ③回族の経済的民族的地位の証明

回族はモスクの修繕や教育事業に献金する習慣がある。この習慣は、石碑の記載に証明すると同時に、回族の経済的社会的地位を反映している。元至正十年（1350年）の「重立清浄寺碑」には、広州懐聖寺が隋開皇七年（587年）にペルシア人ワガス、泉州清静寺が宋紹興元年（1131年）にペルシア商人のナジブ・ムズシルディンによって作られたという歴史が記述されている<sup>4)</sup>。清朝の中国南部では、献金者の身分や姓名や献金額を記録した碑文が多く見られる。作家や役人のほか、商店や一般の人も含んでいるため、宋・元朝の回族住民は政府による虐殺を経験しながらも全体的に拡大し、政治力と経済力を備えつつあることが明らかとなっている。

#### ④異民族文化の融合の証明

早期のイスラム石碑は所有者の姓名と没年を記録しないほど簡素なものであった。あるいは姓名と没年のみか、『コーラン』の生死に関する名言「血気がある者、皆死亡の味を

知る」が刻まれている石碑であった。早期の回族は、伝統的イスラム教の「伝記を立てぬ」習慣に影響されたものの、中華文明との融合に伴い、漢民族の文化に染まり、持ち主の一生を謳歌する碑文が増えつつあった。山東省済南市の「来復銘」には儒教でコーランを解釈する碑文が発見されたほか、泉州市「重修陳埭毅齋公祠碑記」に宋・元朝に海路を利用して来華した陳埭丁氏が地元文化と融合した歴史や祖先の習慣の歴史を明らかにされている。回族イスラム教の変遷が石碑に忠実に表現されたのである。

## (2)芸術価値

回族の石碑は独特な形態と変化に富む書道でイスラム芸術の強い魅力を伝えている。

### ①形態の芸術

泉州市、杭州市、広州市、揚州市、海南省などでは、石碑が多く保存されている。石碑の歴史的芸術的価値で、国の文化財記念に登録された。泉州市海交史博物館、揚州市普哈丁墓、杭州市鳳凰寺、海南省博物館の回族石碑は頂上がアーチ状を成し、周囲にわたって花模様や新月、香炉、草花樹木の模様が刻まれ、半円柱形塔式の蓋に漢字が混ざるアラビア文字やペルシア文字で装飾してある。時代の流れとともに、漢民族の言語は回族の日常生活に多く使用されるようになった。モスクの創立や死者の石碑を立てる場合にはアラビア文字が使用されたが、回族の間では漢民族が頻繁に使用する楷体文字や宋体文字が定着し、明末から清初のモスク石碑や墓地の石碑に多く運用されたことが明らかになった。石碑の形状は宋・元朝のアーチ状から中国式である四角形の形態に変化しつつあった。以上の変化は回族文化の形成と発展を反映している。

### ②書道の芸術

回族の石碑に高度な芸術品と称される書道が多く見られる。泉州市海交史博物館のアラビア語の碑文、西安市化覚巷モスクの漢字・アラビア語の碑文、2007年に発掘された河南沁陽の古碑はその代表作である。特に、水南関石碑の碑文はシュルス体アラビア文字の傑作として、回族文字の書道家より「極めて珍しい碑文」として評価された<sup>5)</sup>。

## (3)文字学の価値

回族石碑の最初の発見は、1171年の南宋時代の泉州市に位置するホサイン・ベン・モハンモド帰真の石碑にまで遡る。800年あまりの歴史を持ち、現在発見された石碑は1000個を超えた。その中、アラビア語の碑文に壮麗なシュルス体や伝統的クファ体、漢字の碑文に篆、隶、楷、宋、行などの諸字体が見えるほか、語彙と文法の変遷も研究の価値に富んでいるとされた。また、中国漢朝の碑文には、作者によって変異された文字を使用する「碑別字」という現象は、同様に回族の石碑で見られた。例えば、「明」や「卑」の字に変化をかける現象は、漢民族の影響を反映している。

## 2. 回族の歴史的石碑の発掘と研究

石碑研究は文化的遺産とされ、文献と文化の諸分野で注目を浴びている。20世紀から、世界中が回族の石碑を中心に、発掘から記録、整理、考証、研究まで取り組み、一定の成果をまとめ上げた。これらの研究は中国の民族関係史、回族史、異文化交流史、さらなる海外交通史の研究に貢献した。具体的に以下のような類型の研究が見られる。

(1)史料研究

①検証研究

価値を重視している史料の検証は、従来の観点や歴史を変える場合がある。そのため、歴史学の研究では検証が重要である。1930年代以降、多くの研究者が始めた回族銘文の時代を巡る検証研究は、歴史学研究者と社会から多く注目されるようになった。1927年に陳垣氏は「回教入中国史略」で最初に、史上初の回族の漢字碑文とされる西安化覺巷モスクの王珙碑の時代検証について質疑を行った。1938年に『禹貢』第五巻では、日本学者の桑原藏氏の「創建清真寺碑」（福山牟潤孫訳）が発表され、次いで回族歴史研究者の白寿彝氏も「〈創建清真寺碑〉に関して」、「創建清真寺碑に記して」<sup>6)</sup>の中で陳垣氏の視点を支持した。それ以降、王珙碑の偽物論が定着するようになった。これらの検証によって、現在保存されている漢字石碑の記録は唐天宝元年（742年）から元至正十八年（1358年、河北省定州市重修モスク碑）へと変化した。それによって、回族における中華化の歴史も縮まった。

②内容研究

石碑からイスラム教と儒家思想の回族文化に対する影響や、回族の中国語や中国社会・中国文化に対する態度が変化したことが明らかとなる。明末期から清初期にかけて、中国の東南沿海部地域に劉智氏などの「儒でコーラムを解釈」に注目する研究者が輩出され、漢字でイスラム典籍を発刊された。奚利福氏の「来複銘」（『月華』[1947]）と馮今源氏の「来複銘析」（『世界宗教研究』[1984]）の研究によって、明朝中期の中原地域ですでにイスラム教思想と儒家思想が融合した回族住民の日常生活が浸透しつつあることがわかった。さらに南京大学の楊曉春氏によると「明朝モスク漢字石碑から見るイスラム住民の対漢文化の態度」（『回族研究』[2005]）では明朝のモスクに記載してある漢字碑文を参考に、当時のイスラム教徒の儒家に対する賛成と釋・道思想に対する否定を分析した。これは清朝以降のイスラム教徒の漢文化に対する基本的姿勢を示している。同氏の「元朝イスラム墓の石碑の発見と研究」（『黒龍江民族叢書』[2007]）では、海南島、広州市、泉州市、福州市、杭州市、揚州市、北京市、寧城市などの元朝回族墓の銘文に対する研究を通して、元朝における中国回族の漢民族化が不十分であったという観点を述べた。

③地域研究

中国は国土が広域で、文化も多様である。回族は同一の信仰心を持ちながら、住居の地域や時代によって発展と特徴が異なる。回族の歴史的石碑は広く分布しているため、回族文化の地域性を研究する素材になっている。2000年以降、翁乾麟氏、王建平氏、郭成美氏、陸芸氏、李興華氏などの努力によって多くの学術的成果がまとめられている。「清朝広西における回族石碑の概説」（『回族研究』[2004]）、「ハーバード大学における中国イスラム教資料（三）金陵劉智墓の写真に関して」（『中国イスラム』[2005]）、「浙江省回族イスラム石碑の概説」（『回族研究』[2006]）、「中国東南沿海部のイスラム墓の石碑研究」（『学術探索』[2007]）と「沁陽回族古碑の検証」（『回族研究』[2008]）などの研究では、広西チワン族自治区、河南省、浙江省、東南地域沿海部、アメリカハーバードで保存された発掘・形態・碑文の内容・歴史的地位に対して総合的研究を展開し、回族社会・文化の地域学的研究に貢献した。

## ④価値研究

回族の石碑はイスラム文化の一部として、その学術的地位と価値の専門的研究がなされた。中国社会科学院李興華氏の「漢字イスラム教碑文の収集・整理・出版の諸問題をめぐって」(『回族研究』[1994])では、回族の漢字碑文の数量、分類、用途、保存状況などの視角から石碑の研究意義と価値を検証している。そのほかにも、胡雲生氏と張璋氏の「河南省回族石碑の史料としての価値を論じて」(『中央民族大学学報』[1996])、馬東祥氏の「定州モスク〈重建礼拜寺記〉碑の中国イスラム教史における重要な地位」(『文物春秋』[2000])、馬東興氏の「故馬公墓銘文の歴史的価値」(『回族研究』[2003])は、様々な視点から回族の石碑の歴史的学術的価値を分析している。

## 3. 整理・翻訳・注釈

歴史研究者である白寿彝氏、中国社会科学院李興華氏、馮今源氏、中国イスラム教学会副会長の余振貴氏らは数年間にわたって石碑の資料収集と整理に取り組んでいる。白寿彝氏の『中国回民族史』(中華書局 [2003])、馮今源氏の『三元集』(宗教文化出版社 [2002])には多くの石碑が収録されている。陝西回族である李希哲氏、白文屏氏、河南回族の馬自斌氏、『済南穆斯林』を編集した馬明氏、民族問題研究所の平克軍氏などは石碑の整理・翻訳・注釈の分野で先端的な研究を行っている。

中国社会科学院の李興華氏によると、「モスクごとに複数の石碑が存在することから、漢字表記によるイスラム教碑文は4000~5000通があり、イスラム教文献の漢文の訳作の十数倍に至る」と説明している<sup>7)</sup>。ここ数十年の発掘と整理から、石碑の実物2000個と石碑を記載する文献数百個が把握されている。

1957年、海路交通史研究者の呉文良氏は30年間にわたって収集した石碑を『泉州宗教石刻』(科学出版社)として編集した。実図を含んだ文献集は中国初の古代泉州市の外来宗教石碑を中心にする作品である。編集されている80枚以上の実図は、泉州市が中国の宋・元時代の海路交通拠点として「海の道」の起点であったことを証明している。2005年、『泉州宗教石刻(増訂版)』(呉文良氏編集、呉幼雄氏増訂)では石碑の数量・宗教の範囲・碑文のアラビア語訳が添えられた。また陳達生氏が編集した『泉州イスラム教石刻』(寧夏人民出版社、福建人民出版社 [1984])では、アラビア語の碑文の翻訳が行われ、歴史的事実を検証し、独特な見解を述べた。答振益氏、安永漢氏が編集した『中国南部回族石碑類選』(寧夏人民出版社 [1999])では、地域ごとに広東省、広西チワン族自治区、湖南省、湖北省、海南省、福建省、四川省(重慶市を含む)、貴州省、雲南省などの碑文116通を収録した。余振貴氏と雷曉静氏による『中国回族金石録』(寧夏人民出版社 [2001])では、27省市自治区の碑文440通を選別し、石碑ごとにその社会的歴史的背景について実証した。薛仰敬氏の『蘭州古今碑刻』(蘭州大学 [2002])では、馬雲亭記念碑塔・碑群の資料を収録し、歴史上の馬福祥(字雲亭)氏の研究で重要な史料をまとめることができた。王子華氏と姚繼德氏による『雲南回族人物碑伝選』(雲南民族出版社 [2004])では元朝から近代に至るまでの碑文85通を収録した。多くの碑文は雲南省と回族の歴史に大きな影響を及ぼした人物の歴史について検証している。伊牧之氏の『済南市イスラム銘文の注釈』(済南市イスラム教協会 [2004])では済南市各地の碑文104通に名称・碑文・注釈・翻訳の説明を加え、筆者の済南回族石碑の研究論文10編と山東省および他地域の碑文10通を付

録したことで、地域的研究価値が高く評価された。元甘肅省文書館副館長張思温氏の『積石録』（甘肅民族出版社 [1989]）では元河州地域（現臨夏市）の石づくり・土づくりの碑文を収録した。なかには、数通の碑文（明朝以降）が西北回族の歴史的銘文として存在していることを公開している。

#### 4. 文化の研究

近年、出版された回族研究の成果としては石碑の検証と利用を重視する傾向がある。泉州市海外交通史博物館および泉州歴史研究会の『泉州イスラム教研究論文』（福建人民出版社 [1983]）、吳幼雄氏の『泉州宗教文化』（鷺江出版社 [1993]）、中元秀氏らの『広州イスラム教古跡研究』（寧夏人民出版社 [2001]）などでは、石碑に関する研究が多く見られる。また、馬明竜氏の『広西回族歴史と文化』（広西民族出版社 [1998]）、吳丕清氏の『滄州回族史』（中央民族大学出版社 [1999]）、佟洵氏の『イスラムと北京モスク文化』（中央民族大学出版社 [2003]）、麻承福氏の『桂林回族』（寧夏人民出版社 [2003]）、趙潜氏の『青州回族溯源』（重慶出版社 [2004]）、胡雲生氏の『伝承と認め—河南回族の歴史変遷研究』（寧夏人民出版社 [2007]）、李正清氏の『昭通回族文化史』（雲南大学出版社 [2008]）などの地方回族歴史研究がある。これらの研究では石碑が重要な資料として残され、専門的な研究や石碑の史料が付録された。寧夏文物考古研究所の『銀川浜墓地』（科学出版社 [2006]）は地方回族の石碑を基礎として地域的イスラム文化を研究した成果である。

現在、回族の石碑の整理・注釈・翻訳の研究には新たな手法が用いられるようになった。2008年12月に大百科全書出版社から出版された『中国少数民族古籍総目提要・回族編（銘文類）』は近年の回族石碑研究における最先端であるといえる。この文献では全国の範囲で元代から1949年までの1000あまりの石碑を整理し、その中から、多くの石碑は周知されていない山や墓地から発見された石碑について検証されている。碑文の内容によって、モスク創立記念碑・勅令碑・事跡記述碑・宗教規定の記述碑・規約の記述碑・契約公示の碑・献金名簿碑・人物碑・人名詩作碑・墓地碑・他の石碑など11種類が分別されている。また、石碑ごとに概要と銘文が付き、その中で碑文の内容・作者・石碑の形態・保存状況・保存地点の資料をまとめている。これらの延長である研究として、2008年に『山東回族古籍』と『湖北回族史料録』（寧夏人民出版社）、2009年に『河南回族古籍総目提要』（中州古籍出版社）が出版された。

回族の石碑研究が繁栄しているというものの、学術界では碑文に関する文献の研究は十分ではなく、専門的検証が行われていない傾向にある。これらの研究では、重要な価値があり、十分に利用されていない石碑もいまだ多い。回族学研究的の深化とともに、これらの課題が解決され、回族の歴史的石碑の価値がさらに利用されることを筆者は願っている。

## 注

- 1) 民俗学研究が1949年を少数民族の古籍の下限とする慣例により、回族の歴史的石碑は1949年までのイスラム文化に関する内容が記載されてあるものを指す。本文は全文が『寧夏社会科学』2010年第4号にて掲載されたものであり、加筆修正した研究である。
- 2) 雷曉静所長は、1963年中国山西省出身に生まれ、現在では中国寧夏回族自治区少数民族古書整理出版弁公室の主任、兼寧夏社会科学院回族古書文献研究所所長および高級氏を務められている。長期にわたって回族文献の整理・研究・出版に力を注ぎ、複数の回族研究プロジェクトに参加した。氏の主な研究としては、『中国回族の碑文の重要な価値と研究の現状』、『中国回族の碑文の種類・地域的特徴・文字の変遷』、『20世紀20～30年代のイスラム教研究誌が繁栄する社会的動因について』、『「回族古書集成」の完成始末とその特徴』などがある。
- 3) 馬鴻超・田志和『吉林回族』吉林教育出版社、1984年4月。谷文双『黒龍江回族』ハルビン出版社、2002年4月。
- 4) 余振貴・雷曉静『中国回族金石録』寧夏人民出版社、2001年、p.68による。
- 5) 同上4による。
- 6) 同上4、pp.542-545による。
- 7) 李興華「漢字イスラム教の碑文の収集・整理・出版の諸問題をめぐって」『回族研究』1994年第2期、p.40による。

キーワード： 回族 歴史的石碑 イスラム教徒

(LEI Xiaojing, BIAN Jing, ICHIKAWA Takashi)